

機関番号：15401  
 研究種目：基盤研究(C)  
 研究期間：2008 ～ 2010  
 課題番号：20530733  
 研究課題名(和文) 大学開放の成立と展開にかかわる社会思想史的研究  
 研究課題名(英文) Social thought and university extension in urban-industrial America  
 1890-1915  
 研究代表者  
 小池 源吾 (KOIKE GENGO)  
 広島大学・大学院教育学研究科・教授  
 研究者番号：00178170

## 研究成果の概要(和文)：

アメリカにおける初期大学拡張運動では、アダムズ、ジェームズ、イリー人の3人物が重要な役割を果たした。いずれも、ドイツ留学を通して、学問、学者の社会的使命に目覚めた気鋭の社会学者たちであった。同時に、社会福音主義者であったという事実も看過できない。

彼らは、古典派経済学を槍玉に挙げ、自由放任思想にかわる新しい社会、「協同する社会」の創造をめざした。そこでは、国家による規制もさることながら、民衆が適正に主体性を発揮することが不可欠とみなされた。とすれば、民衆の知性を涵養することが急務となる。そのための有効な方途を、彼らは、イギリスの先例に見出した。つまり、初期大学拡張運動とは、「協同する社会」の構築をめざし、民衆に高等教育を提供するための方策にほかならなかった。

## 研究成果の概要(英文)：

During the early phase of the university extension movement in the U.S.A., the three figures—Adams, James, and Ely—played an important role. All of them were spirited sociologists fully aware of the social missions of academic disciplines and scholars through their studies in Germany. At the same time, we cannot overlook the fact that they were interested in social gospel.

They pilloried classical economics and aspired for the creation of a “cooperative society” as a new society to replace noninterference. There, as well as regulations by nations, it was deemed essential for common people to exercise proper independence. Consequently, the cultivation of intelligence of the general public becomes an imperative. They found the method for that in the British university extension. In other words, the early university extension movement was nothing but the measure to aim at the establishment of a “cooperative society” and to provide common people with higher education.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：大学開放、大学拡張、大学の社会貢献

## 1. 研究開始当初の背景

教育資源の集積度において、大学にまさるものはない。その意味から、生涯学習社会の実現に、大学が果たす役割はきわめて大きい。実際、1990年代の生涯学習政策の基軸には、大学が据えられていたように思われる。しかし、大学開放事業のその後の展開をみるに、社会人に対する正課教育の開放と産学官連携事業の2つだけが突出している。それにひきかえ、みずからが有する知的、人的、物的資源をもって、地域社会や市民の多様な需要に柔軟に応えようとする機能的開放(functional extension)や、地域社会と対等な互惠関係、つまりパートナーシップを構築しようとする試みや意欲はいたって乏しい。大学開放事業のこうした歪な進展は、大学関係者の狭隘な経営戦略に起因している。

生涯学習社会の要請に大学が十全に応えるためには、大学が、みずからを社会資本のひとつとして再認識すること、その後に、みずからの社会的使命を定位し直す必要があるだろう。その意味において、一世紀世の歴史を誇るアメリカ大学拡張史に学ぶ意義はきわめて大きい。

## 2. 研究の目的

本研究では、19世紀末から20世紀初頭のアメリカ合衆国において、大学拡張が大学の「第三の機能」として受容され、定着をみるその様態とメカニズムを社会思想史的に究明することを目的にした。

そもそも大学は、ヘファリン(Hefferelin, J.B.Lon)が指摘するように、急激な改革にはことさら抵抗するような構造に作られている(J.B.ヘファリン著、喜多村和之他訳『大学教育改革のダイナミクス』玉川大学出版部、1987年、p.35)。実際、イギリスに淵源を有する大学拡張が紹介された時、アメリカにおける識者たちの反応を見てみると、かならずしも好意的ではない。字義通り「大学」を「拡張」するのであれば、大学は存在意義を失いかねないし、もしもそれが、大学教育に取って代わるがごとき妖言であったならば、大学の威信を損なうゆゆしきことである、と多くの大学人たちは大学拡張に批判を浴びせた。その他の大学人は、おおむね無関心を装っていた。こうした状況であってみれば、いまだ、海のものとも山のものともつかぬスキームを大学が受容しようとする、なおさらのことコンフリクトは避けがたい。したがって、そうしたコンフリクトをいかにして克服していったかが、大学拡張史研究の主要なテーマとなる。

そこで、本研究では、以下の諸点を目的に設定した。

(1) イギリス大学拡張をアメリカに紹介し、その実施を提唱したアダムズ(Adams, Herbert B.)の意図について考察する。

(2) アダムズの提案を受けて、ニューヨーク州で大学拡張に着手したデューイ(Dewey, Melvil)の企図と、同州における拡張事業の様態を明らかにする。

(3) フィラデルフィアにおいて大学拡張協会を結成したペンシルバニア大学人、ペパー(Pepper, William)とジェームズ(James, Edmund J.)がめざしたもの、そして同協会が1890年代アメリカで果たした役割について明らかにする。

(4) 1890年代の実践と挫折を乗り越えて、1906年にウィスコンシン大学で復活をみる大学拡張事業の特質と、それを同時代人はどのように受けとめていたのかを理解する。

(5) アメリカ大学拡張史におけるそれらのエポックの導出にかかわった人びとにあらためて着目し、彼らを突き動かしていた社会思想を読み解く。

## 3. 研究の方法

ヘファリンのいうところにしたがえば、大学は現状維持機能に長け、そのぶん保守的な性格を強固に具有していることになる。それだけに、教育や研究など、伝統的な機能とは性格を異にする大学拡張をみずから担うべき機能として引き受けることはけっして容易なことではない。大学が大学拡張を「第三の機能」として受容することは、まさにイノベーションを意味した。そのかぎりでは、大学拡張史を、大学改革の一環に位置づけ、把握しようとしてきたのも肯ける。しかし、それら先行研究では、しばしば、大学改革を大学内改革と同義に捉えた点に限界があった。イノベーションは、内在的要因と外在的要因とが相まって惹起されることを考え合わせれば、大学拡張史研究の場合にも、単に学内改革としてではなく、もっと広範な社会的文脈に位置づけ直してみる必要があるとってくる。社会思想史的接近を用いた理由は、ここにある。

ところで、社会思想とは、広義には文化、ひとの行動様式をいい、具体的には、人間が社会の中で生活し、行動する際の内省的知性を指す。しかし、社会思想と個人思想とは不即不離の関係にある。個人思想を離れて社会思想が存在することはありえない。そこで、本研究では、社会思想の一局面として個人思想を捉えようと考えた。すなわち、大学拡張運動の生成と展開に重要な役割を担った人物に着目して、彼らの思念や思惟を明らかにすることを通して、大学拡張の発展を促した思想を読み解くことに努めた。

## 4. 研究成果

(1) イギリスで創始された大学拡張に早

くから関心を寄せていたアメリカ人に、ヴィンセント(Vincent, John H.)、デューイ(Dewey, Melvil)、ペパー(Pepper, William)、アダムズ(Adams, Herbert B.)がいる。しかし、イギリス大学拡張を、みずからの論文およびアメリカ図書館協会の年次大会(1887年)席上で、公的に紹介したという点で、アダムズの功績に比肩するものはいない。

アダムズの提案に触発されて、図書館を拠点にして大学拡張事業が着手されている。デューイは、ニューヨーク州立大学の理事会に働きかけ、図書館人として独自のやり方で大学拡張事業を創始している。しかし、大学拡張が、運動として、東部から全国各地に燎原の火のごとく拡大をみたのは、1890年にフィラデルフィアで結成をみた大学拡張協会によるところが大であった。初代会長ペパーの後任として同協会の運営にあたったのが、ペンシルバニア大学経済学教授ジェームズ(James, Edmund J.)である。

アダムズが「大学拡張の伝道師」とすれば、ジェームズは「大学拡張運動の推進者」としての役割をはたしたことになる。だが、もう一人、大学拡張に直接手を染めることはなく、その意味で派「後衛」の位置から、大学拡張が依拠すべき理論の開発と提供に貢献した人物がいる。それが、アダムズの同僚で、ジェームズと研究を同じくするイーリー(Ely, Richard T.)であった。

このようにして、アダムズ、ジェームズ、イーリーの3人が初期大学拡張運動を牽引していたことをつきとめた。

(2) 彼らを大学拡張運動に挺身させた思想的背景を読み解く鍵を、3人がいずれも新進気鋭の社会学者であったという事実に見出した。

周知のごとく、19世紀末のアメリカ社会は、「トラスト化の進行と金権政治への動き」、「貧富の隔絶」、個人主義思想の制覇で特徴づけられる。そうした問題状況が「行きすぎた個人主義」と、それを正当化する社会進化思想に起因することを看破した彼らは、古典派経済学を槍玉に挙げ、自由放任思想にかわる新しい社会の創造に努力を傾注することになる。

(3) 彼らの思想形成を考える上で、2つの要因が重要である。そのひとつが、ドイツ大学への留学経験であった。

19世紀後半から世紀転換期にかけてドイツに留学したアメリカ人は1万人を超える。彼らは、自由で科学的な研究を重視する大学観をドイツから持ち帰った。教育・研究の自由や、新しい教授法もドイツ大学の影響といわれる。だが、彼らと大学拡張運動との関係を考える上では、留学中に、教育・研究による国家への貢献を目の当たりにしたことの意味ははかりしれない。学問および学者の社

会的使命を認識しはじめる契機となったからである。

(4) もうひとつの重要な要因は、社会福音思想である。19世紀、産業社会の進展とともに、資本主義は諸矛盾を露呈するようになる。キリスト者としての社会的責任から、愛と奉仕の精神を重んじ、労働者の社会環境や生活改善に積極的に取り組もうとする動きが生起してくる。そうしたキリスト教社会主義のアメリカ的な発露が、社会的福音(Social Gospel)であった。イーリーなどは、1889年、『キリスト教の社会的問題(Social Aspects of Christianity)』の刊行を機に、一躍社会福音運動のリーダーと目されるようになった事実を考え合わせると、社会福音主義の影響、つまりキリスト者としての社会的使命の自覚もけっして看過するわけにはいかない。

(5) 自由放任主義の悪弊を糾弾したが、伝統的なアメリカの個人主義を否定してしまっただけではない。他方、国家による規制の必要性を彼らは唱えたが、ビスマルクのドイツを是認していたわけではないし、いわんや社会主義(socialism)を肯定していたわけではなかった。彼らは、「協同(cooperative)」というタームを用いて社会のあるべき姿を論じた。したがって、彼らが「協同する社会」と言う時、そこには、産業社会の利己主義をキリスト教的精神で乗り越えようとする思いが込められていた。

(6) 彼らの言うところにしたがうと、「協同する社会」とは、国家による規制と民衆の主体性の発揮とのバランスの上に成り立つ。だが、前者は、民衆の利己主義に歯止めをかける装置にすぎないわけだから、「協同する社会」の基調は、あくまで民衆のがわでの主体性の健全な発揮にあった。換言すれば、民衆の知性が問われることになる。この問題を解決するための方途を、彼らはイギリスの先例に見出した。つまり、眼前の社会を改革し、理想とする社会、「協同する社会」の構築をめざして、民衆に高等教育を提供するための方策が大学拡張にほかならなかった。

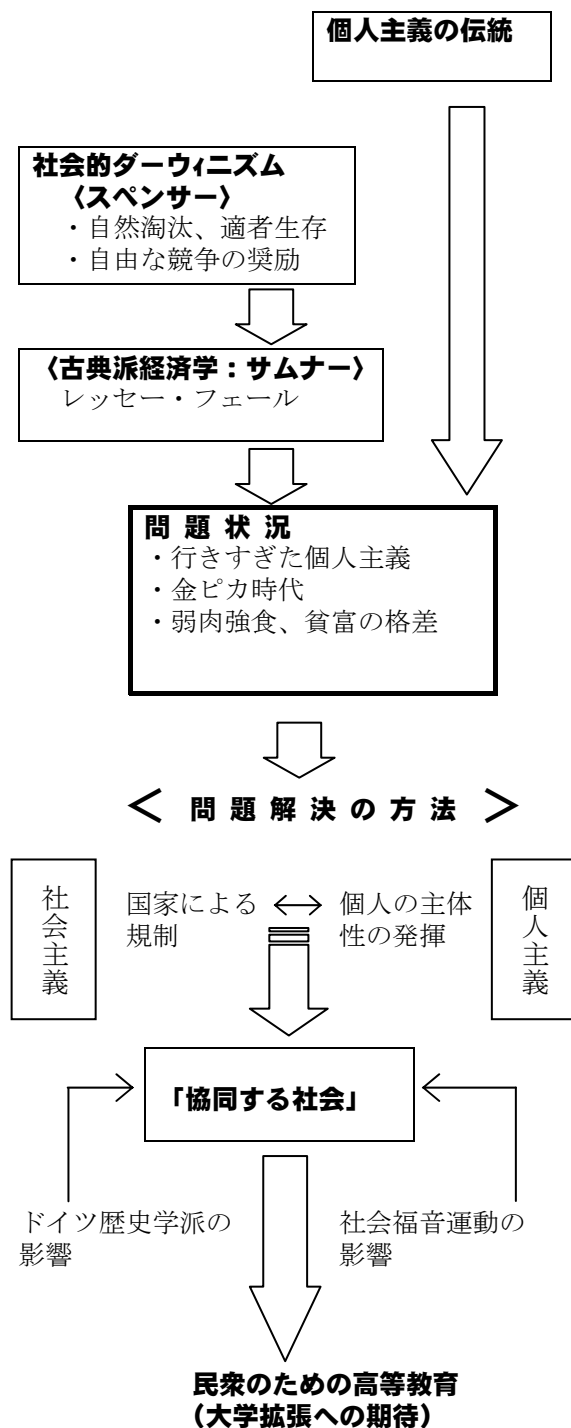
以上の研究成果を図示すると、次のようになる。

(7) 燎原の火のごとく全国に広がりをもせた大学拡張運動であったが、はやくも1890年代の半ばにはかげりを見せ始め、以後衰退の一途をたどる。不況や、娯楽の多様化、熱しやすく冷めやすいアメリカ人の気質、等々さまざまな原因が考えられる。しかし、「大学拡張」と言いながら、拡張すべき「大学」をもたない実践は、もとより矛盾を胚胎していた。一般的に言って、大学は、新奇なスキームに対して、いまだ無関心もしくは懐疑的であった。社会とどう対峙し、もてる資源でもっていかなるサービスを提供するかとい

う問題について、大学ははまだ定見を持ちあわせていなかった。アメリカ大学拡張史の第2幕は、革新主義思潮のもとで、大学がみずからの社会的使命に目覚めるのを待たねばならなかった。

したがって、革新主義思潮と新たな大学観、および大学拡張の再生の構造的説明が今後の課題となる。

### 図 アメリカ大学拡張の社会思想史



### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

1. 小池源吾、「アメリカにおける初期大学拡張運動の群像」、科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書『大学開放の成立と展開にかかわる社会思想史的研究』、査読無、2011、pp.1-39
2. 小池源吾、「20世紀初期アメリカ社会のウィスコンシン大学拡張への眼差し」、科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書『大学開放の成立と展開にかかわる社会思想史的研究』、査読無、2011、pp.40-65
3. 小池源吾、「ウィスコンシン大学拡張の同時代史」、『教育科学』、27、査読無、2010、pp.57-93

[学会発表] (計0件)

[その他]

ホームページ等

### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

小池 源吾 (KOIKE GENGO)

広島大学・大学院教育学研究科・教授

研究者番号：00178170

(2) 研究分担者

( )

研究者番号：

(3) 連携研究者

( )

研究者番号：